# 台湾総督府国語学校生徒執筆「内地旅行日記」（大正元年）

中田敏夫

## 一　はじめに

明治二十八年にはじまった日本による台湾統治では、台湾総督府におかれた民政局内の学務部においていち早く「教育ニ関スル事務」が扱われることになった。学務部長心得として渡台した伊沢修二を中心に、教育に関わる制度・組織作りとともに、実際に教育が施行されていった。明治二十九年に創設された台湾総督府国語学校は、内地人（注一）専用の師範部と、「本島人の高等普通教育として最初のもの」（台湾教育会編『台湾教育沿革史』昭和十四年発行、五六八頁）である国語科とで出発するが、その後いくつかの改正を経、大正八年台湾教育令の公布とともに台北師範学校となる。「国語学校」であった時代は二十年余である。

台湾統治が始まると同時に、本島人への教育が各種の教育機関を通じ行われていくが、国語学校国語科に入学できた本島人はごく一握りの選ばれた生徒達であった。この国語学校で学んだ生徒達が台湾本島人社会の一翼を担っていくことになるわけだが、彼らの日本語力はどのくらいなものであり、どのような考え方・価値観を持っていたのか、非常に興味深いものがある。

本稿で紹介する「内地旅行日記」は、大正二年台湾総督府国語学校公学師範部乙科を卒業した生徒が大正元年に執筆した、内地への三週間にわたる修学旅行日記である。国語学校時代の生徒が書いた作文・日記資料は管見では知らない。大正元年、即ち台湾統治がはじまってわずか十七年後に執筆された本資料は、言語資料としてだけでなく、修学旅行の実施状況、それによる教育効果、本島人の目に映った内地の様子、本島人のものの見方など、様々な角度からみて貴重なものと考える。本稿では、本資料を全文掲載することを目的とする。

## 二　国語学校について

本資料執筆者の学んだ台湾総督府国語学校について、本資料の背景を考える上で有用と考えられるので、『台湾教育沿革史』により簡単に確認しておく。

明治二十九年三月三十一日台湾総督府直轄諸学校官制（勅令第九四号）が公布され、国語伝習所とともに国語学校並びに同附属学校の設置が決まり、同年九月二十五日台湾総督府国語学校規則（府令第三八号）が発布される。これにより、国語学校は師範部及び語学部に分かたれ、師範部は内地人専用の教員養成として出発し、語学部は「本島ニ於テ公私ノ業務ニ就カムトスル者ニ須要ナル教育」を施すことを目的に、本島人専用の国語学科と内地人専用の土語学科を設けた。この時代の国語学科卒業生は「多く通訳又は普通行政事務に従事」（五七四頁）していた。

いくつかの改正を経、明治三十五年七月六日国語学校規則中改正（府令第五二号）の発布により、国語学校の性格が大きく変更された。即ち内地人専用であった師範部に乙科を置き、従来師範学校で養成した本島人学生の一部を、国語学校で養成することになった。師範部の目的も「公学校、小学校ノ校長若ハ教員タルヘキ者及国語伝習所ノ教員タルヘキ者ヲ養成」（第二條）することとなり、本島人子弟の入学する公学校の教員養成も目的とすることがはっきり示された。ただし、甲科が内地人、乙科が本島人という別は守られていた。また、修業年限も甲科は二ヶ年、乙科は三ヶ年とされていた。なお、この規則改正の結果、既にあった台北、台中両師範学校は廃止され、その生徒は国語学校乙科に編入された（五九六頁）。

明治三十八年十二月十三日国語学校規則中改正（府令第九一号）により、師範部乙科の修業年限は四ヶ年に増やされた。これは、同改正で甲科が経費節減と教員需要の急増に伴い一ヶ年三ヶ月に短縮されたのに比べ対照的である。「其の学力不足は既に定評があるので」（五九九頁）ということだが、相当の予算措置を必要とする修業年限の延長である。この延長について、予算増を招いても本島人生徒の教育を充実させようとしていたわけであり、植民地支配の円滑な遂行のためという背景があるにせよ、台湾総督府が教育にかけていた比重の大きさがよく感じられる（注二）。このことは、本島人の中等教育機関の性格を持っていた国語部の修業年限を乙科に合わせる形で三ヶ年から四ヶ年に変更し、「内地学校に遊学せんとする者の便宜にも資せん」（五九九頁）とした、本島人の教育機会への配慮にも現れているといえよう。

明治四十三年二月十四日、国語学校規則中改正（府令第十四号）により、内地人児童の激増への対応として新たに小学師範部を設置することになり、従来の師範部甲科は小学師範部及び公学師範部甲科に、師範部乙科は公学師範部乙科とな

った。

以上の主だった改正を経た後、大正八年一月四日台湾教育令が公布され、実質的には師範教育が主となっていた国語学校は台北師範学校と改称され、名実ともに師範教育の中心的存在となった。

最後に、学資の件について確認しておく。明治二十九年国語学校設立の段階から師範部の生徒については学資の全部を支給することになっており（国語学校規則第二九條）、同時に給費生は卒業証書受得の日から三ヶ年間は民政局長指定の職務に従事する義務も合わせ持っていた（同三一條）。この制度は本島人が師範部乙科に入学可能となる明治三十五年以降も守られ（国語学校規則中改正第二五條・第二六條）、本島人にも内地人同様学資支給が適用された。学資の面では内地人と本島人に差別を設けなかった総督府の施策により、本島人の優秀な人材が教員として確保できていったものと思われる。ただし、大正七年十二月七日国語学校規則中改正により、公学師範部乙科生徒（本島人）にのみ学資及び旅費支給が不適用となる府令が発布された。本島人の取扱いについては支援と削減の両意見が常に対立していたであろう総督府の内部状況が想像される。しかし、実際にはこの府令は適用されなかった。大正八年の台北師範学校成立とともに出された「台湾総督府師範学校生徒学資給与規則」（大正八年四月府令第二九号）では、改めて予科、本科の学生（本島人）に対しても学資が支給されることになった（『台湾総督府台北師範学校大正九年』大正九年十月発行、による）。

## 三　修学旅行について

本資料は国語学校修了にあたって行われた修学旅行の記録である。当時の国語学校の修学旅行がどのようなものであったか、知れるところを簡単に触れておく。

『台湾教育沿革史』によれば、台湾総督府国語学校国語科の修学旅行は、明治三十年七月十六日から五十日間の予定で内地修学旅行に出発したのが始まりである。このときの生徒は、同年七月十四日国語科に入学を許可された附属学校及び各国語伝習所卒業生二十四名であった（『明治三十九年三月台湾総督府国語学校一覧』明治三十九年六月発行、によれば二十一名となっている）。この目的は、「今日本島民に日本的の教化を施して其人心を改進し、速に之を日本化せしめんとするには、本島民をして内地に留学又は観風せしむること」（五七一頁）にあった。そのために国語学校生徒費中に就学旅行費の一部を設け、費用一切を支弁している。

その後も、『明治三十九年三月台湾総督府国語学校一覧』の「学校暦」の項に、「修学旅行　不定」とある通り、修学旅行自体は継続して行われていた。また、『台湾総督府台北師範学校一覧大正九年』の「沿革」の項には、「明治四十二年一月　国語

発音訛音吃音等矯正ノ為メ師範部乙科国語部ノ上級生五名ヲ東京楽石社ニ修学旅行ヲ為サシム」とあり、単なる内地旅行を目的とする以外の修学旅行が実施されるケースがあったこともわかる。

問題はその旅費の支弁がどのようになっていたかである。大正八年台北師範学校に改称されると同時に様々な規則が改正されるが、予科、本科及び公学校教員講習科の生徒（主として本島人）を対象とした台湾総督府師範学校生徒学資給与規則（大正八年四月府令第二九号）には学資として年額三十六円が支給されることだけが規定されているのに対し、内地人給費生徒を対象とした台湾総督府師範学校内地人生徒学資給与規則には入学旅費から始まって食費、被服費、療養費、そして修学旅費の規程がみえる。これにより、台北師範学校時代になってからは、本島人生徒には修学旅行費の支弁は打ち切られたものと思われる。一方、国語学校時代であるが、台湾総督府国語学校生徒学資及旅費支給規則（明治四十三年十月十二日府令第六九号）によれば、国語学校給費生徒には食費、手当、被服、治療費及び旅費が給され、修学旅費も汽車賃・汽船賃・宿泊料・日当が細かく規定され給されることになっている。これより、国語学校時代、師範部乙科に在籍する本島人は総督府の支弁で修学旅行が実施されていたことがわかる。本資料の執筆者も台湾総督府の支弁で内地旅行を行ったものと考えられる。

## 四　執筆者について

廖徳聰氏は、明治二十四年十一月十一日、台中州大屯郡西屯庄上石碑生まれの男性である。既に他界されており、御子息である廖継思氏に経歴をうかがったのであるが、国語学校入学までの確実な経歴をご存知でなかった。大雅庄大雅公学校に入学し、一年ほど後に、西屯公学校が開設されたためにそこに移り卒業を迎えたが、都合四ヶ年の在校だっただろうとのことである。西屯公学校の第一回の卒業生で、同窓は三名だったとのことであるが、入学の年齢、卒業の年齢は正確にはわからないとのことである。卒業後、全寮制の台中農事試験場の講習班に入り、一年から二年そこで学んだとのことである。国語学校入学は、当時修業年限が四ヶ年になっており、卒業が大正二年（二十二歳）であることから逆算して、明治四十二年（十八歳）だったものと思われる。師範部乙科に入学する条件は、明治三十五年七月国語学校規則中改正によれば、「年齢満十五歳以上二十三歳以下ノ本島人ニシテ公学校卒業以上ノ学力アル者」（明治三十八年の改正で入学年齢は十四歳からとなる）ということであり、廖氏はその条件を満たしていた。

廖氏の実家は西屯庄において特別の資産家でもなく、名家というわけでもなかったということであり、廖氏は国語学校入学に当たり、西屯庄の「廖家」の「祭祀公業」（同姓の祖

先を祀るための団体）に三十円ほどを奨学金として借り進学している。想像するに、廖氏は優秀な青年であり、その才能は村（庄）でもよく知られ、村の代表として廖氏を台北に送り出したのではなかろうか。廖氏のような進学は国語学校入学生徒のひとつの姿を示しているものかもしれない。特別な資産を持たない地方の優秀な人材が、総督府の学資支給という恩典もあり、郷土の同姓による相互扶助をはじめとした地域の応援により進学がかなうというものである。ただし、この時代、公学校を卒業できるということ自体、相応の資産家であったことはいうまでもない。

廖氏は大正二年三月二十五日国語学校公学師範部乙科を卒業し、同年三月二十八日台湾公学校訓導の免許を取得し（写真一）、同年西大敦公学校に奉職する（写真二）。大正六年台湾総督府文官普通試験に合格したり、各種学事講習会で講習を重ねるものの、六ヶ年公学校に勤めた後、大正八年四月一日退職している。給費生の職務従事義務の三ヶ年をさらに三ヶ年越えたところでの退職である。これは「廖家」から受けた奨学金に対する礼の気持ちも込められていたのでは、という廖継思氏の説明である（注三）。その後は、信用組合書記、西屯庄助役・副議長、会社員（事務系）などを勤め、教育機関に関係することはなかった。

## 五　「内地旅行日記」について

本資料は、縦二十センチ、横十五センチの罫線入りの洋紙に墨で書かれており、表紙一枚（写真三）、本文三十八頁（写真四、五）からなる。表紙には、「大正元年十月二十三日起　内地旅行日記　第一学級　廖徳聰」（写真三参照）とある。

この「内地旅行日記」は修学旅行の滞在記であるが、このレポートが修学旅行参加者全員に課せられたものなのか、あるいは全くの個人の手控えなのかはわからない。ただ、写真五の六行目の「四時に鐘の合図で」の訂正の仕方をみると、下書きがあって清書したものと思われる。しかし、字句の訂正が何カ所かある点、中国式の簡略字の使用（本文注二・十四参照）がみられる点など、これをそのまま提出したとも考えにくい。

本文掲載にあたり、漢字の旧字体は新字体に改めた（例えば、「國」は「国」に、「學」は「学」に）。そのほか、一部繰り返し記号に替えて該当する語句で示した以外は、原文通りである。

### 注記

一、本稿では、台湾総督府国語学校の呼称に従い、日本の内地出身者を「内地人（生徒）」、台湾人を「本島人（生徒）」と記す。

二、台湾総督府の給費について、荘隆福氏は次のように述べている。

初期の国語学校付属学校の給費生と、国語伝習所の甲科の学生に、食費1日15銭、補助金1日5銭を支給したのも、台湾人の子弟に日本語を学習させるべく利益で誘ったものである。反日運動の武力制圧に比して、初期の日本語推進運動は奨励の方式で行われた。

（中略）日本当局の50年間にわたる台湾統治の方法は、簡単に言えば飴と笞である。（「日本植民地における言語文化政策と台湾への影響」『台湾日本語文学報9　湯廷池教授退而不休紀念論文集』一九九六年七月）

台湾総督府の本質は荘氏の説く通りであろう。しかし、ここで指摘したかったのは、日本語の普及のために「利益で誘った」のは間違いないが、総督府の教育の比重の置き方を客観的に捉えることである。修業年限、教官数、学資支給を含めた諸手当、といった教育行政の体系を確実に整理していくことで、台湾統治時代の教育の全体像がはじめて描けるものと考える。今後の課題である。

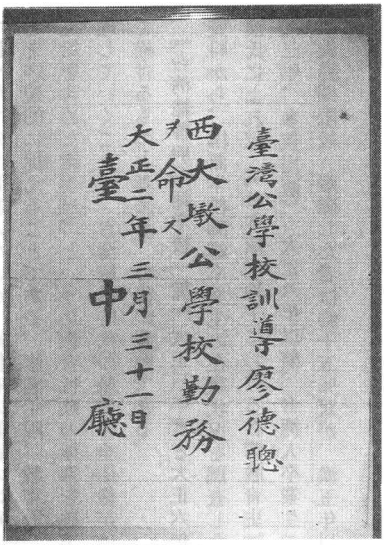
三、『台湾総督府国語学校一覧』大正三年度と大正六年度の資料から、国語学校師範卒業生の在職状況を調査した鐘清漢氏によれば（『日本植民地下における台湾教育史』一九九三年、多賀出版）、大正六年以前、台湾人卒業生で三年の義務期限後、離職した者は約十五％だが、満五年以上一〇年以下で約半数が離職し、一〇年以上になるとわずか三分の一しか在職していないということである（二九四―二九五頁）。廖氏の六年は平均的な在職年数であったことがわかる。なお、鐘氏は、日本人卒業生に比べ台湾人が非常に離職率が高い理由として、動機、抱負、家庭環境が原因で方向を変えること以上に、「師範教育内容の偏向や、公学校の台湾人・日本人教師の俸給・地位の不平等と、研修・福祉等の面における不合理・不公平等が歴然とし」ていること、「総督府の教師活動に対する制限、社会の変遷、時代思潮の刺激等」を指摘している（二九五頁）。

## 付記

本資料は廖徳聰氏の御子息廖継思氏が所蔵されていたものである。今回は特別なお計らいで公表をお許しいただいた。また、廖継思氏には本文についての様々なご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。なお、本稿は交流協会日台交流センターの「一九九七年度歴史研究者交流事業」の基金を受けて、一九九七年から一九九八年にかけての半年間台湾に滞在した折りに得られた資料に基づくものである。

臺灣公學校訓導免許狀
臺中廳
廖德聰
右ハ臺灣公學校訓導タルコトヲ免許ス
大正二年三月十八日
臺灣總督男爵伯爵佐久間左馬太
第七九八號

（写真一）


臺灣公學校訓導廖德聰
西ヲ大墩公學校勤務ヲ命ス
大正二年三月三十一日
臺中廳

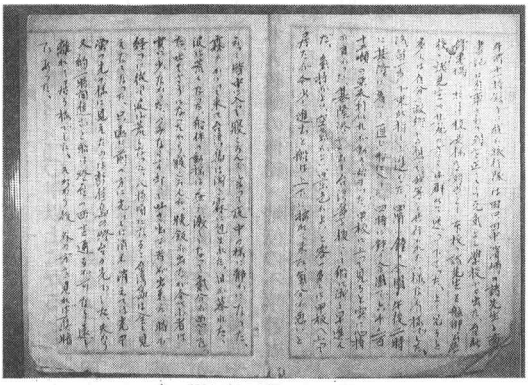
（写真二）

內地旅行日記

（写真四）

大正元年十月二十三日起
內地旅行日記
第一學級
廖德聰

（写真三）



（写真五）

本文

内地旅行日記　大正元年

十月二十三日

朝早くから種々の用意をして出発の時間に間に合ふ様にと誰も急がしさうに騒いて居た、準備が出来て出発する前に体操教室に於て校長先生が御懇切な御訓話をなされた、今其の大体を書けば「此の旅行の目的は桃山[注一]御陵参拝と宮城拝観[注二]と伊勢大神宮の参拝であるからその積りでなければならぬ、旅行隊は台湾人を代表して内地へ行くのだからすべての動作に注意せねばならぬ、我国固有の美風を観察せねばならぬと共に物質的方面にばかり注意するのでなくて精神的方面にも大に注意せねばならぬ」と云ふ様な事である、午前十一時余りに我が旅行隊は田口、田中、浜崎諸先生と南書記に引率されて列を正しくして元気よく学校を出た、台北停車場に於ては校長様を始めとし本校の諸先生と[注三]紘紳公学校の諸先生や其他の方々は群れて送って下さった、よく見ると多くは自分の故郷を想って我等と共行かれたい様な有様でした、汽笛一声で東北指して進んだ、午後二時に基隆に着いて直ぐ船に入った、四時に鐘の合図で六千三百十二噸の亜米利加丸が動き始まった、甲板に上って見ると実に心持が良かった、基隆港を出て台湾島を後にして船は漸々[注四]早進んだ、気持がよい、空気がよい、景色がよいと客の多くは甲板へ上って居たが今少し進むと船は上下に揺れて来た、気分が悪いと云って皆中に入って寝ころんでしまって夜中の様に静かになった、霧がかゝって来て台湾島は漸々霧に包まれた、日が暮れた、波は荒くなった、船体の動揺は益々激しくなって気分が悪くなった、吐きさうになったから寝ころんだ、晩飯が出たが食ふ者は実に少なかった、のみならず却って吐き出す者が出来た、時が経つに従って波は荒くなった、八時頃になると台湾島は全く見えなくなった、只遠く前の方に光っては消え消えては光って蛍の光の様に見えたのは彭佳島の燈台の光でした、夫から又約一時間進むと船は燈台の西を通るが可なり遠く離れて居る様でした、それから後外の方を見れば真暗であった、

十月二十四日

夜は明けたが起きる者は少なかった、皆酔払ってしまったからだ、見える所は只大海原と空だけでした、大波は昨日よりも荒い、低い所は谷になって高い所は山になる、逆巻けば頂上は真白になって雪の様である、我が乗って居る船はその頂上へ上っては下り下っては上って非常に揺れた、時々ズドーンと云ふ音がして船は激しく動いたのは大波が船にぶつかったのである、客の多くは大に吐いて蒟蒻の様になった、大病でも罹った様で便所へも中々行かれない様でした、これは実に洋上の地獄である、日が暮れてもさうであって大へんに苦しかった、

十月二十五日

午前四時頃になってから波は漸々穏かになった、従って朝飯を食へる者も大部あった、正午近くなると東の方に島が見えた、五島だ五島(注五)だと騒いで皆元気がついて争って見た、処が船員に問ふとそれは九州の南にある女島と男島で五島ではないといった、それぢや五島は何所にあるかといって昼飯が済んでから皆甲板へ上って四方を見廻した、午後一時余りになると西の方に現はれて来たのは五島である、地図で見れば五島と云ふのは小さい島が五つ六つ並んで居るが実際の五島はさうではなくて大部大きな山がある、中には朝鮮ぢやないかと思はれるのもある、漸々進むと鄭成功の生まれた平戸は右の方に見えた、この辺は小さい島が沢山あって小舟も多い、夕暮になると玄界灘に着いたがあまり風がなかったから波は穏かでした、九州は右の方にぼんやりに見えた、八時頃になると門司の電燈が見えた、も少し行くと船が止まって検役をした、九時余りに門司港に着いた、市街と余程離れて居るから小蒸気船が何艘も来て乗客を載せた、田中先生は此所で御上陸なされるから甲板で見送りをした、門司の市は(注六)山の下に長く続いて居て浜辺から麓へ一段々々になって居る、浜辺では汽車が十分間位に一度通り麓では電車が五分間位に一度通る、船から見れば下関の市街も畧門司に似て居るがさう長くはない様である、電燈は何ら(注七)も非常に沢山あって普通の電燈の外に青もあれば赤もある、まるで台北の年末大売出しの様な景色で実に奇麗なものである、アゝ此の景色は実に良い、まだ見たいけれども碇泊は僅か一時間しかないので間もなく又出発した、馬関(注八)海峡を通ってから霧がかかって来たから何も見えなくなった

十月二十六日

朝早くから甲板へ上って瀬戸内海の景色を見た、瀬戸内海には島が沢山あって大へん美しいと云って居るがさう美しいものでもないです、大きい島が多くて大低岩の出て居る禿山であるからだ、然し波らしい波がなくて穏かであるから甲板で四方の景色を見ながら進む心持は流石に愉快である、殊に旭が真赤で雲の間から出て居たのを見ると尚更であった、内海には小舟と航前(注九)船は非常に多い、多くは漁船であるさうだ、播磨灘へ入る所では小舟が台湾の鵞の群の様であって明石海峡と神戸港の辺の航前船は白鷺の陣の様であった、明石海峡を通る時には須磨明石は見えたが行かれなかったの残念でした、大阪湾へ入ると和歌山の辺の陸は薄く見える、神戸港を眺めれば流石に航前船や汽船は海一面にあって檣は林の様に見える、陸の近くまで行くと又検役を受けた、午後二時頃になると船は碇泊した、小蒸気船に乗って上陸した、神戸に居る本島人は五六人迎に出て来た、彼等の顔を見た時の心持は中々云へない位であった、上陸してから直ぐ三の宮駅へ行って五時余りの列車に乗って京都へ行った、八時余りに京都に着いた、三條通りにある伏見屋と云ふ宿屋に泊った、

十月廿七日

電車に乗って桃山御陵に参拝に行った、桃山街路と御陵へ行く道は可なり大きいけれども参拝人は道一ぱいになった、(注十)かうなら常のものであって以前はこれよりもずっと多くて道に人が一ぱい詰って足を伸すことも出来なかったさうである、勿論それらの人は色々あって老人もあれば子供もある、男も多ければ女も少なくなかった、学生もあれば軍人もある、これに就て見れば日本の臣民は皇室国家に対する念はどうであるかは考へられるであらう、御陵は山腹にあって神社の様な建物が真中にあって神前の方には広い庭がある、こゝは参拝人の参拝する所であって私共は此処で列を作って最敬をした、御陵参拝が済んでから主に京都市の東の方にある名所古蹟を見た、先づ大きくて奇麗な稲荷神社へ参ったので次は東福寺であった、これは天台宗であって火事の為めに本堂は焼けたが深い谷の上に架ってある有名な通天橋はまだ残って居る、これは今では紅葉の名所になって居るさうだが少し早いからあまり奇麗でない、それから三十三堂を見てから大仏殿へ行ったが木造の大仏様は火事の為めに焼けたので半像になって居るから入らないで只その大鐘だけを見た、この鐘は実に大きなもので厚さ九寸直径九尺高さ一丈七尺周囲二丈一尺重さは二万二千貫あると云ふ事です、

次に帝国博物館へ行った、これは明治二十五年建てて二十八年に落成したもので絵画彫刻武器図書等昔から今までのものが沢山並んであって歴史等を研究するには最も都合がよいだらうと思ふ、けれども時間が少ない為め詳しく見る事が出来なかったのは惜しい事である、それから西大谷を通って清水寺へ行った、遠方の景色や京都市は明かに見えて景色の非常に良い所である、有名な清水焼はこの近所から出るのである、清水焼は実に立派なもので又大へんに安いけれども携帯不便の為め買はなかった、

清水寺から円山公園へ行ってそれから智恩院へ行った、建物は大へん宏大であって有名な鶯張りの床は面白かった、即ち人が歩けば床はキュウキュウと鳴るのである、こゝも大仏殿の様な大鐘があって大梵鐘と云ふのである、

今度は疏水運河を見に行った、インクラインと云って墜道を作って山の彼方と此方の水流との交通を連絡して居るので余程面白い、それから紀念動物園へ行った、これは今上陛下が御慶事のあらせられた時紀念として設けられたものであって動物が余程多い、白熊赤熊猩々錦鶏等は珍しいものである、動物園を出てから平宮神宮へ参拝に行った、一名大極殿と云って桓武天皇様を祀る官幣大社である、本日の見物はこれで済んだのである、

十月廿八日

先づ島津製作所へ行った、此処は専ら理化学用の機械や道具と動物の標本や模型を作る所である、案内者は誠に親切に色々説明して下さった、無線電話機や軌道説明器や空気を抜くゲーデロータリポンプ等は珍しいものである、次は染織学校

へ行ったがこの学校の先生達が機械や色を染める事に就て詳しく説明して下さった、それから相国寺、御所水野神社平野神社金閣寺二條離宮を見たが時間が少ない上に雨が降ったから二條離宮から宿屋へ帰った、

十月廿九日

京都を出発して名古屋へ行くのであったが停車場へ行く前に東本願寺へ行った、この寺は真宗大谷派の本山であって殿堂は元は何度も焼けたので今の殿堂は明治二十八年に再建したものであると云ふことです、大きくて立派なもので周囲は一丈以上の大柱が八十六本もあると云ふ事で実に其の宏大で且つ美麗な事に驚いた、

午前八時余りの汽車に乗って愈々京都を出発した、漸々進むと琵琶湖の一部分は左の方に見えた、琵琶湖へ着く前に沢山の稲が黄金の様に一面になって居た、いや大津から米原にかけて皆さうであった、近江国は米が多く出来るのも無理はない、それからさきは桑畑が多いのである、それを見ると養蠶する心持が湧いて来た、桑畑が多いからその作り方も大体分った、

午後二時余りに名古屋へ着いた、携帯品やゲートルを旅館に置いて直ぐ名古城を拝観しに行った、城は六層あって屋根の上にピカピカ耀って居るのは金の鯱である、この鯱はまじり物のない黄金で作ったもので高さは八尺もあるさうです、案内に依って第六層へ上って見れば遠い山や田畑や名古屋市は皆足の下に見えて景色が実に佳かった、それから自由散歩になった、歩いて見ると市街は真直に長く続いて居るが一体に狭い、尤も電車の通って居る所は広くて立派な商店もあって盛んに商売の競争をやって居るのもある、自由散歩は午後六時までしか許されて居なかったから晩は外出しなかった、

十月三十日

三時起床して五時五十分に名古屋を出発した、御油や蒲郡の辺では養蚕が盛んである様です、用宗駅まで行くと富士山は奇麗に前方に見えた、静岡を過ぎて江尻へ行くと右の方に景色の好い三保松原は見えた、岩淵の辺へ行くと富士山は非常に高くなった、裾は大へんに長くて広く伸びて居る、真白になって居る頂は雲の上に出て天に続いて居る様である、一寸見ると空か雲か分らな位で実に高くて誠に奇麗である、若しその上へ上ったら日本全国は皆足の下に見えるだらうと思はれるのである、日本一と云はれるのは当然である、よく見れば何も上りたい気がする、御殿場から先へ行くと富士山は漸々見えなくなった、惜しい事だが仕方がなかった、午後六時余りになると新橋に着いた、拓殖局の御方と留学生等が停車場まで行って迎へて下さって誠に有難い事である、それから電車に乗って小石川区へ行った、東京の電車は実に驚くべきものであって往来線があるにも拘らず、僅か一分間か二分間の間に一台宛どんどんやって来てしかも大低は満員になって居たのである、大塚と云ふ所で下りて高砂寮へ行ったがそこ

の舎監や多くの留学生と面会した時は誠に愉快で誠に嬉しかった、

十月三十一日

雨が降って来た、大変に寒かった、台北の一番寒い時よりも寒い様でした、ふるえながら出発して聾唖学校へ行った、この学校は元盲学校と一緒になって盲唖学校と云って居たが明治四十三年の四月から別れて聾唖学校となったのである、云ふまでなく専ら聾唖になった憐れな人を集めて普通の人と同じ様に教育して居る学校である、私共が入ると沢山の生徒が玄関へ出て来て色々の手真似をして居たがどんな事を云ふのか一向分らなかった、立派な体で立派な着物を着て居るが誰も話をする事が出来ないで只手真似をばかりして居るのを見ると涙がこぼれるのである、けれども中へ入って見るとその書方と云ひ文章と云ひ手工や図画など何一つ我等に劣るものがない、話の出来る者もあるが発音の不完全の為めに話が分り難いのである、聾で且唖である人はこんなに立派な人になったのは教育の力でなければ到底出来ない話である、なんと教育の力は大きいものではあるまいか、こんな教育の有様はその学校長から詳しく説明して下さったがそれを省いて置かう、聾唖学校を出てから植物園へ行ったが雨がどんどん降るから只ずっと廻っただけで何も得たものがない、

午後は盲学校へ行った、前国語学校長町田校長から色々御話しなされた後盲生が出て来て学芸の演習をした、音楽算術（珠算）体操読書、書取等をやったがその上手なのに驚く外はない、唱歌もピアノも琴も皆専門家のやるとは違はない、算術は加減乗除共に上手で私共の及ばない位である、体操は普通体操と遊戯をやったがそのやり方は中々自然であってちょっと見た処で盲人とは思はれないのである、書取は勿論点字でやるが、私共の筆記よりはあまり遅くなかった、読むには手で点字を触りながら読むのでこれもすらすらでした、盲唖でさへ斯様に立派な人間になって居るから私共はこの盲唖の人に劣らない様に勉強すると共に盲唖になって居ない児童をうまく教育する方法を研究せねばならぬのである、

十一月一日

靖国神社に参拝してから宮城を拝観した、宮城内の御事を申すと畏れ多い事だから略して置く、只拝観を御許しなされた大御心に感謝せねばならぬ、何となれば高等師範学校の生徒や其の他国民教育に関係の深い人には特に拝観を御許しなされて居るが特別の場合の外普通の人には誰にも宮城拝観を御許しなされないさうである、これで考へると私共は実に此の上もな幸福で誠に感謝せねばならぬのである、

それから青山御葬殿場へ参った、御葬殿場は総べて御大葬当時の有様をその儘残して置いたものであって参拝人は非常に多くて桃山御陵に負けない様であった、その光景と轜車を拝観すると実に悲しさに堪へられなかった、

午後に拓殖局へ行って元田総裁閣下から親切な御訓話を承っ

た、大体はこう云ふ事であった、「諸子は他日卒業したら師範[注十五]部の者は公学校教育の本旨に背かぬ様に第[注十六]二の国民になるべき者をよく教育し、国[注十七]語部の者は忠実に公私の業務に従事して小は台湾大は我帝国を益々発展させる様に勉めなければならぬのである」と御話なされてから茶菓を下さった、それから寄宿舎へ帰った、東洋協会と留学生は私共を迎へる為めに立派な晏会を開いた、東洋協会や拓殖局の多くの御方を始めとし又多くの留学生と一緒に会食したのは実に紀念とすべき事である、只一つ困ったのは西洋料理ですから作法は分らなかった、それで仕方がなしに泥棒をして御臨席の御方の作法を見ながら食べるのであった、

十一月二日

本日の見物する所は名高い日光だ、宇都宮から日光までの間の山の景色は大へんに美しかった、青い杉の間に黄色や真赤な紅葉が処々にあって天然の綾織になって居た、又この辺の田畑の土は皆黒色をして居る、寒い為めに有機物はあまり腐らないさうです。日光の東照宮は日本一と云はれて居るので実に奇麗である、殿堂は麓にあって方々に十余りに別れて居る、屋根はすべて銅で作ったので飾り物は皆ピカピカして居る、木材や石材等は皆立派なものである、漆も極上等なもので彫刻や絵画は皆当時の名家の作ったものばかりである、美しいと云ふよりもむしろ贅沢だと云ふ方が却ってよいかも知らぬ、周りが一丈以上になって居る大きな杉が真直に高く沢山立って居るのは東照宮と同じく奇麗である、景色も建物も皆良いが其の内に居る坊様は何うもいけない、町では一組十銭の絵葉書を坊様は二十銭で平気で売って居る、尤も買ふか買はぬかはそれは拝観者の随意ではあるけれどもそんなに金の欲しい坊様では何うも感心する事が出来ないのである、時間の都合で瀑布を見に行かないで二時余りに解散して四時頃の汽車で帰った、

十一月三日

先の天長節の日であるから朝飯の時に田中先生の御話があった、第一の見物は浅草公園であった、公園は割合に汚なくて見るべきものもあまりないが花屋敷だけは面白くて且つ奇麗であった、先づ目に付いたのは花人形である、これは専ら花で以て人形を立派に色々作ったものである、次は大きな菊の花であった、一本の木に二百三百も奇麗な大きな花が咲いて居る花は台湾では迚も見られないのである、それから拓殖博覧会を見に行ったが時間の少ない為めに詳しく見られなかったのは何うも遺憾である、今その大体を云へば台湾と朝鮮の成績は最も良い様で農産物等も大へんに多い、北海道の方は海産物が主であって樺太の方は海獣の皮や魚類が多い、各植民地の人種や活動写真を見てから東京一ばんと云はれて居る上野公園へ行った、桜の木が沢山あるが花が咲いて居ない、帝室博物館は大低京都のと同じ位であって動物園は京都のに及ばないが珍しい河馬が一疋居る、公園としてはあまり奇麗

でない様だが遊びに行く人が非常に多いのである、尤も夕方に多いのである、昼飯が済んでから自由解散になった、電車に乗って神田へ行かうとした処がどの車も満員になって乗られないから仕方なしに歩いて行った、東京の商人は正直であるさうだが他地方の人が行くと普通の値段の二倍も掛値を云ふ者が少なくない、それで信用のある大きな店や均一の店へ行かないとちょっとしたものを買ふにもやられるのである、外出は六時までしか許されなかったから入用なものだけ買って直ぐ寄宿舎へ帰った、晩飯が済んだ後着物を片付けた、九時に高砂寮を出発して銀座通を見てから新橋停車場へ行った、十一時発の夜行列車に乗って東京を去った、高砂寮の舎監先生と留学生達は万歳を唱へて私共を送って下さった、誠に有難い事である、

十一月四日

午後二時〔往十八〕り山田に着いた、直ぐに徴古館と農業館を見に行った、徴古館と云ふのは歴史上の人形や標本等が沢山並べてあって誰が見ても益になるのであらうと思ふ、農業館と云ふのは農産物や農業に関する統計表や農具等種々のものが並べてある所である、中に養蚕の有様を実際と少しも違はない様に作ってあって一見すれば明かに分るのであるから余程有益な所であるが、その大体しか見なかったのは惜しい事である、それから伊勢大神宮に参拝しに行った、清かな水の流れて居る五十鈴川で手や顔を洗ったり雑嚢や外套等を置いてから参った、御宮は森の中にあって辺には周り一丈や二丈位の大きな杉が沢山ある、何れも真直に大へん高く立って居る、その間を通った時には何の音も聞えないで極静かであった、実に神々しい感じが起ったのである、参拝が済んでからもお日が暮れか(ママ)ら宿屋へ帰った、

十一月五日

朝飯が済んでから直ぐ山田外宮に参拝した、それから山田を出発して奈良へ行った、午後一時頃に着いて宿屋へも行かないで四組に別れて名所古蹟を見に行った、春日神社の神鹿はおとなしくて可愛し(ママ)い、一千余頭もあるが日暮にラッパを吹けば皆一処に集るさうです、この神社の殿堂は非常に多くて道は四方八方に分れて居る、石燈籠は非常に多くて其の数は実に二千余りもあると云ふ事です、名所は多いけれども一々挙げる暇がない、その中で大仏殿は実に宏大なものである、有名な大仏様はちょっと見れば佐程大きくは見えないがその高さは五丈三尺五寸あると云ふ事です、午後四時余りに宿屋へ帰ったが夕食後一同集って田中先生が今まで見た物を総括して整理して下さった、〔往十九〕

十一月六日

四時に起床して七時余りに奈良を出発した、畝傍で下りて綏靖天皇様の御陵と神武天皇様の御陵と橿原神宮に参拝した、正午過ぎに天皇寺に着いた、観音寺を見てから大坂城へ行く、この城は凡そ三百年前に築かれたもので今は師団司令部にな

って居る、城へ上って見ると大阪市全体は皆見える、大阪の工業は東洋第一と云はれて居るが流石に市街には大きな煙突が沢山あって煙は空一ぱいになって居る、

大阪城を出てから造幣局へ行ったが廊下を通るだけで説明も聞かなかったからあまり分らない、次に中島公園へ行って休んだ、この公園は云ふまでもなく淀川の真中にある島であって大阪で一番良い公園であるさうだが建物が沢山あって遊ぶ所は実に狭いのである、淀川の中には多くの家があるのは珍しいものである、これは多分大阪では建築が得難いからであらうと思ふ、中島から停車場へ行って五時頃の汽車で神戸へ行った、宿屋に着いたのは夜の七時余りでした、

十一月七日

上陸してから今までは今朝だけゆっくり寝られた、八時余りに出発して小学校の先生に案内されて先づ市役所へ行った、これは神戸市の人の建てたもので中々贅沢に出来て居る、次に忠臣楠木正成公を祀って居る湊川神社に参拝した、それから市立幼稚園を参観した、五六歳の無邪気な子供が沢山居て何うも可愛らしい、出来ることなら其の教師になりたいのである、造船所も見に行った、仕掛の大きな事はとても考へがつかないのである、種々の機械は勿論、大きな磁石で鉄板を運び、材木を挽いたり、銷ったりするのも機械でやるのである、

燐寸製造会社も見た、第一に驚いたのは職工の手先の早い事である、尤も彼等は毎日同じ事ばかりやって居るから早いのも無理はないがマッチを箱に入れるには一人が一時間に一千以上は出来るだらうと思ふ、然しそんな敏捷な職工でも一月の賃金は僅か十なん銭か二十銭位であるさうだから生活難と云ふ事はこれを見ても考へられるでせう、正午は近くなった、諏訪山へ行って弁当を食べた、この山はあまり高くはないが神戸市は勿論大阪湾や淡路等までも見えて景色は大へんに佳い、小学校の先生は此処で私共の写真をとった、諏訪山から小学校へ行った、神戸の教育会の方では態々茶話会を開いて迎へて下さった、二三人の御方から親切な話を聞いてから台湾人の小学生と挨拶をした、小学生は六名居って面会した時は何うも懐しかった、四時頃になると築港を見に行った、説明して下さったことは余程多かったがそれを一々書く事が出来ない、只或事務官の御話なされた事の要点だけを書けば次の通りである、「神戸港は種々関係からして将来余程有望な所ですから政府や人民は多くの金を使って築港するのである、大阪港があるからといって神戸港はなくてもよいと云ふ事ではない、大阪は主に輸出する港であって神戸は主に輸入する港である、両方共に大切であって決してその一方を欠けてはならぬのである」と云ふ事でした、

これで本日の見物は済んだのである、

十一月八日

今朝は昨日よりも遅く寝た、荷物を片付けてから船に乗った、

それは拾時余りであって、正午になると出航した、甲板へ上って景色を見ながら進んだのは愉快でした、間もなく漸々寒くなったから中へ入った、日はもはや暮れた、瀬戸内海の景色は見られないのは惜しい事であった、

十一月九日

午前八時に門司へ着いた、昼の景色は迚ても此の前の夜景には及ばない、暫く休んでから先生と一緒に下関へ上陸した、応神天皇様を祀って居る八幡宮と安徳天皇様を祀って居る赤間神宮とその御陵に参拝してから市街を歩いて見た、町はあまり立派でもないし又寂しいのである、門司はこれよりも寂しいさうですから行かないで船へ帰って昼飯を食べた、沢山の商売人が馬関名産の硯や大理石で作った真円い奇麗な玉や種々の細工物を売りに来た、天ぷらの金細工物も多かった、これは驚くべき商売人が持って来たのである、実価よりは十数倍も掛値を云ったが幸いにやられなかった、

午後四時に又出航した、風が少し強いから玄海灘へ出ると船は揺れた、然し吐く者が殆んど無かったのは幸いだ、夜になっても矢張り揺れて居た、

十一月十日

風が吹く上に雨も少し降った、波は益々高くなった、船は益々揺れて気持が悪くなった、乗客は大低酔ってしまった、然しこの船の揺方は亜米利加丸と違って左右に動くのだから吐く者は僅かしかなかった、昨晩あまり多くの菓子を食べたから一度吐き出した、此の日は何うも寂しかった、

十一月十一日

風が止んだ波も穏かになった、私共は皆活発になって騒ぎ出した、午飯もボーイの驚く程に食った、滑稽話や昔噺をする者もあればワイオリンとハーモニカを合奏する者もあった、唱歌をする人や本を読む人等色々あった、無線電信の新聞が出て来た、バルカンの戦争の有様や内地の出来事や台湾の有様等を船の中で知る事が出来る、午後四時に蓄音機の演奏があった、夕食後に面白い活動写真と水兵の剣舞があった、又船員が三人出て滑稽な話をしたり浪波節を歌ったりして大へんに面白かった、洋上の極楽と云ふのはこんな事であらうと思ふ、

十一月十二日

もお台湾に近いから四時頃に起床した、まだ暗いけれども甲板へ上ると間もなく海上から光が現はれた、彭佳島の燈台の光である、それを見るともおじきだと喜んだ、漸々進むと霧の中に山が薄く見えた、午前六時余りになると三週間前に出発した基隆に着いた、雨が降って居るがあまり寒くはなかった、上陸してから直ぐ直通列車に乗って台北へ帰った、停車場まで迎へて下さった御方は幾人もあった、それから整列して歩調を合わして勇しく学校へ帰った、体操教室で校長様を始めとし志保田先生や田中先生が帰校後についての種々の注意を御話しなされた、寄宿舎へ入った時の心持は何とも云は

れなかった、午後二時に体操教室の傍で旅装の儘紀念写真をとった、これで三週間前嬉しく楽しく待って居た内地旅行は済んだ、アヽ何時又内地へ行かれるだらうかと云ふ事は我が旅行隊は誰も考へて居るでせう

注記

一、明治天皇陵。明治天皇は明治四十五年七月三十日没。同年大正と改元。この年の十月の旅行のため、主目的の第一に掲げられたものと考えられる。

二、略字「鬼」が用いられている。以下同じ。

三、国語学校に付設されていた三つの公学校のうちの一つ。

四、「だんだん」と読むのだろう。中国語に「漸々」、日本語に「漸次」があり、混用されたものと思われる。

五、繰り返し符号「〳〵」が用いられているが、印刷の都合上繰り返されたことばを起こして示した。以下同様。

六、「市街」と記そうとしたところを、書き落としたか。

七、「何らも」は意味不明。台湾語では「何等」は、疑問詞に用いられたり（何等人士）、「とても」という副詞で用いられたり（何等美観、何等偉大）するが、その混入の可能性もある。

八、下関海峡のこと。現在の台湾語でも下関は「馬関」と称される。

九、帆船のこと。

十、「かうなら」は意味不明。「こういうのは」にあたる意を表現しようとしていたものとは思われる。

十一、「記念」はすべて「紀年」を使用。中国語では「紀年」が用いられるのが一般的である。

十二、オランウータンのこと。

十三、「なんとも」と読むか。「どうも」ということばを、「なんとも」に近い意で用いており（例えば十一月七日、「無邪気な子供が沢山居て何うも可愛らしい」）、「どうも」と読んだ可能性もある。

十四、略字「雇」が用いられている。以下同じ。

十五、国語学校は組織上「師範部」と「国語部」に分れていた。「二国語学校について」参照。

十六、「第二の国民」は、「次代の国民」の意としての発言か、内地人を第一の国民、台湾本島人を第二の国民と位置づけての発言か、ここでは解釈を保留しておく。

十七、注十五参照。

十八、「二時余り」と記そうとしたか。

十九、「もう」となるべきところ。他に二カ所ある（ともに十一月十二日）。

二十、「天ぷら」はメッキの意。

二十一、「驚くべきことに」などのようになるべきところ。

（なかだ・としお、本学助教授）